

賭愛^{とあい}

御神 十夜

「物事に行き詰った時、私は運を天に任せることがある。必死に考えたって、どうにもならないこともあるのだ。そんな時は運命の数字に託してみる。例えば、十・六・四・一……。私と共に寄り添ってきた数字は、きつと私に、いや、君にも幸福をもたらしてくれることだろう」

筆島十三 『美談』より

俺には神と崇めている人がいる。
筆島十三。物書きだ。

彼女（恐らく）は特定の出版社を持たない。いつもランダムな時期に、ランダムな会社からボンと発売される。今まで発表した作品は十三作。今度出すときは筆名は十四となるだろう。

全てが謎に包まれている彼女の新作情報を手に入れるには、この名前だけが頼みの綱となる。

日課であるネットサーフィン中にたまたま見つけた作品サンプル。俺はそれに惹かれるものがあって、サムネ

イルをクリックしたのだったが、絶対に間違いない。作者を見るまでもない。

販売場所——

コミックスーパー20XX
東B16a

念のためアカウント名もチラと確認してみる。——@toshi_f. これはもう、確定だろう。

田舎者の俺にとって、東京への遠征は一大事だ。交通費に宿泊費、これは大きすぎるデイスアドバンテージとなる。時間だけは無駄にある典型的な大学生には少々キツイ。だがしかし、男なら、いや、オタクなら。行かねばならぬ戦場がある。

「アツい、アツすぎる……」

もちろん、色々な意味で。

灼熱のコンクリートジャングルの熱さ。

有名レイヤーを囲むようにできている人間の壁の厚さ。そして、俺と同じ志を持つ人間の心の熱さ。

持参したペットボトルの中身はもう三分の一度。しかし、水など買い足す気は更々ない。筆島の紡ぐ文字は俺の視覚から体内に入り、やがて決して枯れない俺の血となるだろう。

それならば今、ただの透明な液体に使う金は一銭たりとも持ち合わせていないのだ。

目当てのブースは会場の端。案外目立たないところに位置している。案の定、ブース周りには比較的閑散としていた。座っている男性の売り子に声をかける。

「二冊ください」

ぴったり八〇〇円。お釣りを出さないのがマナーと聞いた。

「ああ…、すまないね、兄ちゃん。これじゃ売れないよ」

「は…？」

目の前が真っ白になった。ここまできて売り切れ…？俺の人生初ミスは、こんなにもあっさり終わってし

まうのか…？

だが俺は、机の下で段ボールの中に、見覚えのある表紙が数冊残っているのを見逃さなかった。

「そ、そこにあるじゃないですか！取り置きですか？そんなことできるなんて一言も…」

売り子の男は静かに値札を指さした。

「八〇〇、愛…？」

「そ、円じゃなくて、愛。持ってる？」

「あります！」

俺は即答した。

「じゃあ、出して？」

くいくいっと売り子は手のひらを俺に差し出してくる。

「あ、愛ってどうやって出すんでしょうか…？」

「さーねー、俺は知らないよ。さ、ひやかしたら帰った

帰った」

「ど、どうしても俺、欲しいんです！」

「そーだねえ…、俺はあんまりよくわからないけど、皆さんあちらの方に行かれますねエ」

男が指示したのはカーテンで仕切られた向こうの空間だった。

「あそこって…、入ってもいいんですか…？」

「さあ、これ以上は俺は何とも」

それきり男はにやにや笑いながら俺を黙って見るだけとなつてしまった。さつき啖呵切った手前、これで帰るわけはいかない。

ぐっと拳を握り締め、俺は暗色のカーテンをくぐった。

「うわっ…。なに、ここ…」

そこには数台のテーブルと、それを囲むオタクたち。

一面を覆う白い靄はタバコの煙…、ではなく彼らの熱気だ。

異様な雰囲気、俺は物怖じしてその場に立ち尽くす。すると、きちっとした黒服にはそぐわない明るい髪的女性が俺に声をかけてきた。

「お兄さん、ようこそ。初めまして、かな？両替カウンターはこっちだよ」

「両替…？」

「もしか、さっきの通貨・愛とやらに交換できるのだろうか。」

「そ。どれを変える？」

「どれって…」

勇気を出して一万円札を差し出す。恥ずかしながら、先程の八〇〇円とこの諭吉が今の俺の全財産だ。

しかし、黒服の女性はその元来のチャーミングな顔に似合わない苦笑いを浮かべた。

「これかあ…、ダメじゃないけど…。レート、かなり低

いけど大丈夫？」

「ど、どのくらいですか…？」

「一〇愛ってとこかな」

「え、たったの…？」

あの一冊を手に入れるには八〇〇愛、つまり今の八十倍必要ってことか…。

またしても固まって立ち尽くす俺を横目に、後ろのオタクが割って入ってきた。

「こ、交換しないなら先にいいかな…？ふ、筆島の自費出版本。しょ、初版じゃないし、サインはないけど…、悪くないレートでしょ？」

ふんふんと荒い鼻息交じりに、男が一冊の本をさした。

「はい。こちらであれば、四二〇愛で交換させていただきます」

あれは…、筆島十三がまだ筆島八だった頃の一冊。定

価は当時五〇〇円、現在の流通価格で言えば三〇〇〇円といったところか…。今でもたまに通販してるし、版数が多ければそこまでの価値はないはず。それなのに…、

「あの本がこの諭吉より価値があるってことですか？」

両替を終えたオタクが立ち去った後、俺は黒服に問いかけた。

「そう。あちらの方が持ってきた本には、この諭吉にはないものがあるんだよ。…分かるかな？」

俺はみたび立ち尽くしそうになったが、この状況と、この異様な空間をうつすらと理解してきたような気がしてきた。

「この紙切れよりも筆島に対する愛が詰まってるってことです」

「（名答）」

さあ、どうする？と黒服は俺に問いかける。もちろん入手しないわけにはいかないので、素直に両替を申し込んだ。

「がんばってね」

黒服はそう言って微笑んで、ぎゅっと俺の手にコインを握りこませた。

「ここでできるゲームは、ルーレット・ポーカー・ブラックジャック。好きなもの楽しんで。愛が溜まったら教えてね？」

「は、はいっ……!」

勢い任せに返事したのはいいものの、俺はポーカーの役は分らないし、ブラックジャックもイマイチ分かってない……。と、なればルーレットが一番手っ取り早く愛を増やせるゲームになるだろう。

数人が取り囲むルーレット盤に恐る恐る近寄ってみる。幸いにも盤面は見知ったものであった。

赤か、黒か。奇数か偶数か。それともどこかの数字に一点賭けをするか。何せ俺には一〇愛しかなく、一愛たりとも無駄にはできない。

こういう時オタクというものは、あらゆる娯楽作品からの断片的知識を用いて苦境を乗り越えられることがある。大丈夫だ。ギャンブルの作品だって、いくつも読んでき

た。

俺は震える手で最初のコインを Betting エリアに置いた――。

「嘘、だろ……」

今回ボールが収まったのは赤の三。気付けば、当初十枚あったはずの手元のコインは、全てあっけなくディーラーの手に回収されていた。

「やばい、どうしよう……」

コインはもうない。と、なれば金かコインを借りるしかない。そうだ、近くに ATM はないだろうか。空のコイン入れを片手に俺は会場を見回した。

運が良いのか悪いのか、俺は次のゲームを準備していたディーラーと目が合った。

「お客様、手持ちがなくなればゲームオーバーです。お引き取りを」

こちらから声をかける前に、俺の思考を完全に読んで

いるかのような言葉が降りかかり、俺を絶望の淵へと突き落とす。

「そ、そこをなんとか……。お金なら、友達や親に言って今すぐ振り込んでもらうんで……!」

俺の必死な言葉も虚しく、ただでさえ険しい顔つきのディーラーが更に眉間の皺を濃くした。

「お客様、極論そのようなものは当方としては必要としておりません。ですので……」

お引き取りを。そう引導を渡されるのを俺は黙って聞くほかなかった。俺はぐっと目を瞑り、その言葉の衝撃に耐えようとする。

「……です、お客様がお待ちの中で、一番レートの高いものをご案内いたしましょう」

「えっ……?」

これが本当の最後のチャンスってやつかもしれない。コミスパの神は俺に微笑むのを忘れていなかったようだ。

「い、家にあるコレクションは避けたいんですけど……! あ、いや、嘘! なんだっていいです! なんだって差し出します! 筆島の作品は全部頭の中に入ってるんで! 形がなくなっただって、か、構いません……!」

とにかく俺は頭を下げることでしかなかった。わずかな沈黙ののち、恐る恐る顔を上げると、ディーラーがその表情を少し緩めていた。

「ご安心ください。今ここにあるもの、それでいて何よりも価値のあるものをいただきます」

ほっとしたのも束の間、ディーラーの顔つきがまた、スッと鋭くなった気がした。ここから先はもう戻れないのだろう。

「賭けていただくのは、筆島十三に関する記憶です」

「き、記憶……?」

ディーラーは淡々と続ける。

「いつ、どこで、どのように出会って、どこに惚れて、どう感じて……。筆島に関する記憶。それ即ち筆島への

愛の根源なのです」

「勝てば貴方には、本日限りの無限の愛を差し上げましょう。しかし負ければ、筆島に関する記憶を全て頂きます」

凜と通るディーラーの声が会場を支配していた。他の卓に居たオタクたちも皆、こちらに注目している。ディーラーは俺の目をまっすぐに捕らえ、覚悟を問うた。

「賭けますか。それとも……、諦めますか？」

「賭けます」

俺は即答していた。冷静になって考えれば、記憶を賭けるなんてあり得ない話だが、俺にはそんなこと考える余裕なんて無かった。いや、たとえ熟考できる時間があったとしても、俺の結論は変わらない。

俺の即答に周りのオタクたちがざわめきだした。

「俺、前に記憶賭けたヤツ見たけど、負けてひどい姿になってたぜ……」

「ぼ、ぼくならゴメンかな……」

「新作を読めねくらいなら、最初から筆島のことを忘れてしまった方が幸せなのかもしれねえな……」

「俺は負けません！」

周りのオタクにはではなく、自分に言い聞かせるために俺は叫んだ。

俺の覚悟を聞いたディーラーが静かに頷いた。

「承りました。勝負は一回限り。私とブラックジャック対決をしていたくださいよう」

「こちらは特定の記憶に対する記憶喪失薬です。……使われないことを祈りますが」

ディーラーは薄紫色の液体が詰まった瓶を取り出した。いかにもまずそうな色が、効果の説得力を増していた。

「それでは……。プレイス・ユア・ベット」

コト、とディーラーは卓上にその小瓶を置く。

ブラックジャック。ルールはよく分かっていないが、

とりあえず合計を二十一にすればいいのだろう。ノー・モア・ベットの声の後、俺の手元に二枚のカードが配られた。

手札はクローバーの十とダイヤの六。この際スートは関係ないのだが、何かと気にしてしまう。と、いうことで俺の現在の合計は十六。ディーラーは必ず十六以上になるまでカードを引くはずだから、俺はこのままで良いわけがない。ディーラーのバーストで勝つなんて、ダサすぎる。自ら勝利を手繰り寄せなきや意味ないのだ。長考するまでもなく、俺は手札の追加を選択した。

次に並べられたカードはダイヤの四。これで俺の手札の合計は二十。

「つぶねェ……」

思わず声が出てしまった。ほっとして机に突っ伏しかける。

「おいおい、兄ちゃん！ディーラーの手札も見た方がいいぜ？」

気の抜けかけた俺に周りのオタクのヤジが飛んできた。これはいけない、と急いでディーラーの札に目を遣ると、

ディーラーの手札はクラブのエースと伏せられたカードが一枚。エースは一にも十一にも数えられるはずだ。何か嫌な雰囲気が一気に俺を包んだ。

「ディーラーが ブラックジャックになる 十を引く 確率は、約三〇%……」

ぼそっと、メガネのオタクが呟いた。それを皮切りにざわめきが波のように広がっていく。

インシュランス「保険 も手だったが時すでに遅し、か？」

「そりや意味ないだろ」

「ここで引く奴はいないっしょ」

「正攻法で行けば、だが……」

波は次第に大きくなり、俺の思考さえも飲み込もうとしている。

このままいけば、俺は七〇%の確率で勝てるということか……？しかし、二十一になれば一〇〇%負けるとは、ない……？でも、次に一を引く確率って……？

何も考えられなくなった俺はひたすらにカードを見つめる。

「ヒット・オア・スタンド？」

ディーラーが俺に決断を迫る。
時間はもうない。俺の視線はカードから全く動かさなくなっていた。

「決断を」

その時、俺の脳裏には筆島のある言葉が浮かんだ。
そうか、俺の肉体は、精神は、やっぱり筆島で構成されているんだ。筆島を信じることに、それ即ち己を信じることなのだ。

覚悟を決めてディーラーを見上げると、俺はトントン、と机を叩いた――。

「よっしやあああつ！」

雄叫びを上げ、歓声に包まれる青年を遠巻きに見つめる女がいた。黒服に身を包んでいるその女は、度重なるブリーチで傷んだ前髪に恥ずかしそうに触れている。

青年の引いた手札はハートのエース。見事二十一だ。一方のディーラーの二枚目はクラブの九。普段なら申し分ない手札だったが、今日ばかりは青年の神引きの前に

太刀打ちできるものでは到底なかった。

「ふふ…、やっぱり作者としてはさ、あのくらい愛が強い子に買ってもらえたら本望だよね」

胸上げて祝福されはじめた青年を見つめるその眼には、慈愛が籠っていた。

いつの間にか卓から離れていたディーラーが、そっと黒服の隣に立つ。

「良い趣味とは言えないですけど。今年は特にいいものを見せてもらいました」

黒服は更に満足げな笑みを浮かべる。

「ね。この諭吉、あの子が買う本に挟んでおいて。素敵なお愛を見せてもらった見物料つてとこで」

「承知しました」

ディーラーは諭吉と筆島の新刊を手に、また青年のもとへと戻っていった。

久々に今日は良い酒が飲めそうだ、と黒服は感慨に耽る。

「お兄さんありがとう。とーっても価値あるものを見せてもらったよ。……次もよろしくね」